



「困ったときは、お互いさま」の精神をひきついで ～さぼうと21の活動の今、そしてこれから～

社会福祉法人さぼうと21 チーフコーディネーター 矢崎 理恵

活動の始まり

1978年、今から40年以上前、日本政府はインドシナ各国（ベトナム、ラオス、カンボジア）で相次いで起こった政変により流出した難民の受入れを人道的国際貢献の観点から決定しました。翌1979年、当時67歳だった相馬雪香という女性が「民間のわたしたちもできることから」という、ごく当たり前の、しかし凜とした志をもって「インドシナ難民を助ける会」（現認定NPO法人難民を助ける会 [AAR JAPAN]）を設立しました。1992年に生まれた「社会福祉法人さぼうとにじゅういち」（さぼうと21）の活動の原点です。

さぼうと21は、相馬が常々口にしてきた「困ったときは、お互いさま」に込められた精神を引き継ぎ、日本に暮らす難民など定住外国人の自立を支援する3つの事業を粛々と継続しています。「自立支援事業」（就学支援金の支給）、「学習支援事業」（ボランティアによる日本語やパソコン、学校教科などの学習支援）、「相談事業」のそれぞれが、互いに重なり合いながら進められています。就学支援金を受ける学生が学習支援室のボランティア活動に参加することもあれば、相談に訪れた方が学習支援室で日本語学習を始めることも珍しいことはありません。

「さぼうと21はわたしの実家」

さぼうと21の大きな「自慢」は、学習支援室の活動に参加する多様なボランティアの方々、その方々の活動ぶりです。大学生世代からシニア世代まで、縁あって当団体の活動に関わってくださった方々が、難民の方々の自立までの長い道のりを、日々、心ある「ご近所さん」として見守ってくださっています。

自国において迫害を受けるおそれがあり、愛する故郷を離れ、移動することを余儀なくされた難民の方々に

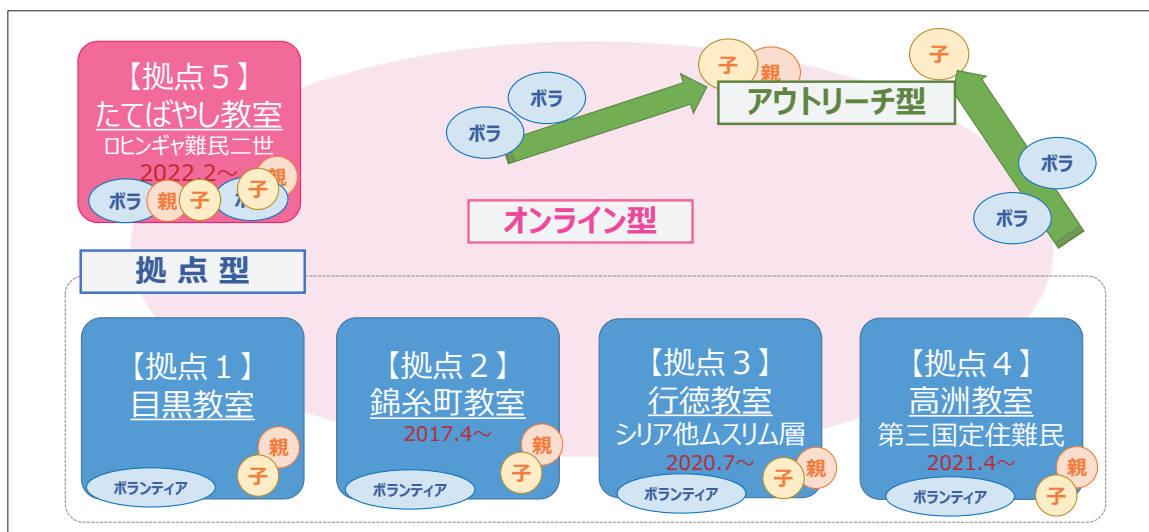
とって、日本での生活はゼロからではなく、マイナスからのスタートと言ってよいでしょう。そんな中、「さぼうと21は気が合う場所」「わたしの実家」と感じて、日本語学習、教科学習、ワークショップなど学習支援室の活動に参加し、前向きに日々歩んでいる方々とのやり取りの中で、参加する全ての人たちが力を分け合っている、さぼうと21はそんな「学びの場」です。



高校生の横には良き先輩である社会人ボランティアが

「一人も取り残さない」学びの場づくりを目指して

2020年の始めに、さぼうと21が考えていたのは、どうしたら「一人も取り残すことなく」学びの機会を提供できるだろうかということでした。それまで目黒、錦糸町で行っていた教室型の学習支援だけでは、教室に來られない状況にある子どもたち、大人たちの学習希望に応えられないことが大きな課題となっていたからです。そして、休眠預金活用事業により（公財）日本国際交流センター「外国ルーツ青少年未来創造事業」（SYDRIS）の助成を受け、「『一人も取り残さない』ための包括的学習支援展開事業」をスタートさせることとなりました。「拠点／教室型」「アウトリーチ／出張型」「オンライン型」の学習支援を組み合わせ、柔軟に外国ルーツの青少年の学習希望に応えていくことを目指しています。



拠点型+オンライン型+アウトリーチ型学習支援を組み合わせ

「オンライン型」の学習支援が2020年の4月にスタートし、さぼうと21の学習支援室は、「週末の学びの場」から「毎日の学びの場」へとかたちを変えました。現在は、学習参加者もボランティア参加者も、拠点型、アウトリーチ型、オンライン型を自分の希望や都合に合わせて上手に組み合わせ、活動に参加しています。

その一つの成果として、2022年2月、長年の懸案事項であったロヒンギャ難民二世を対象としたオンライン上の「学習支援室」をスタートさせることとなりました。現在、50名以上のロヒンギャ難民二世の小中学生が学びの機会を得て、学習活動に参加しています。オンライン上の「学校」には、全国から多くのボランティアの方にご参加いただいています。

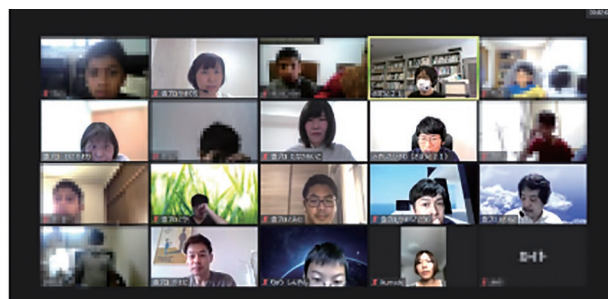


ロヒンギャ難民二世対象のオンライン上の学校、開講式は現地で対面で実施

さらなる課題解決に向けて

コロナ禍にあって学習支援室の活動が多様に展開する中でも、参加する方々が顔を合わせ、ほんの少しでも言葉を交わし、喜怒哀楽を分かち合うことが活動の基本であることに変わりはありません。そして、その活動は、

参加する方々が「やりたいこと」「必要だと感じること」を実現する場でもあります。防災についてのワークショップは、様々なかたちで毎年数回実施されています。最近では、社会人となった若者たちに向けてオンラインでの「生活力向上のためのワークショップ」をスタートさせました。また、コロナ禍にあっても、カフェチームが、食のイベント実施を計画し実行しています。ハンディクラフトを生業とする方が、オンラインで手芸教室を開催しています。さぼうと21らしく、参加する方々自身が楽しみながら、活動は続いています。「実家」も「ご近所さん」もなくなることはありません。



「雲のプログラミング教室」の協力で、オンライン・プログラミング教室、元気に開催

2022年11月末現在、ウクライナからの避難民は2,000名を超え、難民認定されたアフガニスタンからの退避者は100名以上となっています。難民支援の団体にとっては正念場です。今こそ、官民連携により、インドシナ難民受入れ開始から40数年という年月の中でそれぞれが蓄えてきた力と智慧を出し合い、難民・避難民の方々の自立をしっかりと支えていかなければならないと、覚悟を新たにしています。